

☆年間第24主日(9月11日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (出エジプト記 32章 7-11, 13-14節)

その日、主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は墮落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鑄像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。

第二朗読 (使徒パウロのテモテへの手紙 I 1章 12-17節)

愛する者よ、わたしは、わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです。以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。そして、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスによる信仰と愛と共に、あふれるほど与えられました。「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。しかし、わたし

が憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

福音朗読（ルカ 15 章 1-10 節）

そのとき、徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも 大きな喜びが天にある。」

「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

爽やかな日になりました。お元気でいらっしゃることと思います。こうして毎日曜日に皆さんとともにミサを行うことができるのは大変素晴らしい恵みだと感謝します。父である神様は見失った羊や無くしてしまったドラクメ銀貨のような私たちを見つけて喜ぶ人々のように、私たちの回心を待ち望んでおられるのです。

第一朗読（出エジプト記 32 章 7-11, 13-14 節）

主なる神はイスラエルの民が主からの恵みに反し、偶像崇拜の墮落に対し怒りをもってモーセに臨まれます。「私を引き留めるな」と。それほどイスラエルの民の反逆の罪は大きかったのですが、それに対しモーセは神をなだめて言います。「あなたがイスラエルの民に約束してくださったことを思い出してください」と。その約束は「この土地を永久にあなたたちに継がせる」というものでした。このようにしてイスラエルの民の反逆にもかかわらず主である神の約束は取り消されることなく、誠実に実行されてゆくのです。イスラエルの民への約束はアブラハムの信仰への神の慈しみとして永久に受け継がれていくのです。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙 I 1 章 12-17 節）

パウロは回心する前の主イエスへの迫害について回想して、主イエスの寛大な恵みに感謝しています。「憐れみを受け、溢れるほどの恵みを受けました」と。そして「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られました」と真っすぐな信仰告白をしています。そのイエスには憐れみと慈しみが溢れているとパウロは述べています。イエスは私たちに対し何よりもまず救いを望んでおられるのです。神には罪に対する罰よりも慈しみと憐れみが勝っているのです。その神に対し「誉と栄光が世々限りなくあるように」と述べています。私たちも私たちに対する神の慈しみと憐れみの数々を思い浮かべ、パウロとともに神を讃えましょう。

福音朗読（ルカ 15 章 1-10 節）

今日の福音は本来ならばルカ15. 1-32と長いものですが、前半のたとえについて考えてみます。後半のたとえは「放蕩息子」の話になっています。前半は見失った羊と無くしたドラクメ銀貨のはなしです。この二つのたとえ話はきっとイエスが体験した話でしょう。99匹といなくなった1匹の羊。

どう考えても釣り合わない話ですが、神にはそのような損得勘定ではない愛の感情が勝っているのです。放っておかれた羊はどうでしょう。99匹の羊は羊飼いが見えなくても自分たちは見守られていると安心して草を食べているのです。それだけ羊飼いの愛情を信じているのです。一方、いなくなった羊は寂しさに打ち震えていたでしょう。その寂しさに打ち震えていた羊にとって羊飼いの声にどれだけの愛を感じたのでしょうか。そしてその愛はほかの99匹の羊も同じように感じたことでしょうか。無くなったドラクメ銀貨を探す女の人にはどれだけ必死に探したことでしょうか。自分の今日の生活がそこにあったからです。その銀貨を見つけた時の安堵感、よかったという感情は皆さんもきっと経験したことがあるのではないのでしょうか。神の場合はそれと比較にならない大きな喜びが天にあるとイエスは私たちに語っています。これは神の本当の心です。



「中秋の名月」 教会の屋上より (9月10日 19:00)

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光